

「スクールカースト」とは何か？

—首都圏の公立中学生を対象とした質問紙調査の分析から—

鈴木 翔（東京大学大学院）

1. 問題の所在

本研究の目的は、「スクールカースト」と呼ばれる現象が、生徒の学校生活にどのような影響を与えるのかを中学2年生を対象とした質問紙調査から明らかにすることである。

「スクールカースト」とは、教室内の生徒の「人気」の高低を要因として、生徒の人間関係に序列構造を生み出し、それが教室内の生徒間で共有されることによって、明確な「身分の差」となって現れる現象である。これまで、この現象が生徒に与える影響としては以下の2点が指摘されてきた。

まず、このカースト制度の下位に置かれた生徒は、クラスメイトから身分の低い存在、つまり目下の存在だと見なされて、いじめの標的になりやすくなるということ。そして、もう一つは、たとえいじめにあわなかったとしても、自分に自信をなくし、学校生活への適応に大きな影響を及ぼすということである（森口 2007、萩上 2008 など）。

もし、学校にこのような現象が存在しているのならば、一部の生徒にとって「スクールカースト」は、教室内の居心地の悪さ、すなわち適応障害を規定する要因となっている可能性があり、この現象の仕組みを解明することは、今日の学校教育における重要な課題の一つだと考えることができる。

これまでの研究においても、教室内に生じる人間関係の序列化は、いじめや不登校などの具体的な教育問題への引き金になることが示唆されている（森田 1991、竹川 1993）。

また、この人間関係の序列化は、生徒の間で多く支持を得る生徒と、まったく支持を得ない生徒の間の身分の差であると考えれば、「スクールカースト」と呼ばれる現象と適合的であると考えられる。

しかし、このような序列化、すなわち「スクールカースト」が実際に存在するのかが検証されて来ず、それゆえ、今までこの現象が生徒の学校生活にどのような影響を与えるかということには関心が向かなかった。

そこで本研究では、「スクールカースト」による「身分の差」が、生徒の学校生活へ与える影響とはいかなるものなのかを中学2年生を対象とした質問紙調査の分析を通して検証していく。

2. 調査の概要

◆調査対象：神奈川県公立中学校 17 校の 2 年生
◆調査対象校の選定方法：神奈川県を 4 つの地域ブロックに分け、それぞれから市を抽出し、更にその中から対象となる中学校を選定

◆調査方法：①教室内での集団自記式と②教室内で配布した調査票を後日学校に持参してもらう方法を併用（有効回収率は 83.2%）

◆調査時期：2009 年 10 月下旬～2010 年 1 月中旬

◆有効回答数：2874 名（男子 50.9%、女子 49.1%）

3. 仮説の設定

本節では、分析で検証する仮説を設定する。

「スクールカースト」は、これまで存在自体の実証がされてきていない。そのためにまず、これまでに指摘されているとおり、本当に「スクールカースト」が生徒の学校生活に影響を与えているのかを検証することが先決であると考えた。そこで、仮説 1-1 を設定した。

仮説 1-1：「スクールカースト」は、生徒の学校適応（「いじめの標的のなりやすさ」も含む）や自己肯定感に影響を与える。

また、これまで、教育社会学の生徒文化研究では、生徒の学力が学校適応を規定するとして実証されてきた。では、もし「スクールカースト」も学校適応に影響を及ぼすならば、「学力」と「スクールカースト」はどちらの方が生徒の学校適応に影響を及ぼすのだろうか。それを検証するため、仮説 1-2 を設定した。

仮説 1-2：「スクールカースト」は、「学力」よりも生徒の学校適応を強く規定する。

さらにこれまでの研究で、「学力」は、「階層」の影響を受けることが指摘されてきている。だとすれば、「階層」が高ければ、「学力」が高く、「学力」が高ければ、学校に適応できる、という図式が成り立つ。では、「スクールカースト」が生徒の学校適応に影響を与えたとしたら、「スクールカースト」は「階層」の影響を受けているのだろうか。

「スクールカースト」と「階層」の関連を測るため、仮説 1-3 を設定した。

仮説 1-3：「スクールカースト」は「階層」の影響を受けない。

次からは、このクラスの人気ヒエラルキーが何によって、規定される傾向があるのかをこれまでの指摘を受けて検証していく。森口(2007)によれば、クラスの人気ヒエラルキーは、コミュニケーション能力(自己主張力・同調力・共感力)の3次元マトリクスにより、規定されるとされている。そこで、仮説2-1を設定した。

仮説2-1: 生徒のコミュニケーション能力が「スクールカースト」地位に影響する。

また、森(2006)によれば、「スクールカースト」は容姿の優劣も影響しているという。よって、仮説2-2を設定した。

仮説2-2: 生徒の容姿が「スクールカースト」地位に影響する。

本田(2005)によれば、現代の子どもたちの努力は二分しており、旧来の能力を育むための「閉じた努力」よりも、「明るく楽しい」日々を送るための「開かれた努力」が優勢になりつつあるという。もし、上記の仮説が実証されれば、「学力」とは違い、「スクールカースト」は、「開かれた努力」により得た能力によって、その「身分」が左右されるものだと考えることができる。そこで、「スクールカースト」の上位に位置付くためには、「開かれた努力」を要するという仮説を立て、検証していく。具体的には、以下の仮説により、検証する。

仮説3-1: 「スクールカースト」上位の生徒は、(自分の気持ちと違っても) 偽りのキャラクターをクラスメイトに提示するなどの努力を要する。

最後に、「さらに『開かれた努力』を必要とするのは誰か」という問いを立てて検証する。本田は、旧来の能力に比べて、「ハイパー・メリトクラシー」化された社会で必要とされる能力はより家庭の影響を強く受けるものとしている。そこで、「そういった能力がなかった生徒にとって、『スクールカースト』上位に位置することは、さらに「開かれた努力」を必要とする」という仮説を立てる。

仮説3-2: 小学校時点で「スクールカースト」下位で、中学校入学後に「スクールカースト」上位になった生徒には、(自分の気持ちと違っても) 偽りのキャラクターをクラスメイトに提示するなどの努力をさらに必要とする。

4. 分析結果 (一部)

本節では、前節で設定した仮説の検討(一部)を行う。

まず、「スクールカースト」は学校適応と自己肯定感に相関があることが確認された。いじめられるリスクに関しては、全体的にみれば、関連はあったが、「スクールカースト」中位群が一番「いじめの標的のなりやすさ」は少ないという結果であ

った。しかし、クロス表での分析によれば、結果はすべて0.1%水準で有意であり、仮説1-1は支持されたとと言える。

次に、仮説1-2の検証を行う。先行研究と同様に、学力は、学校適応や自己肯定感、いじめの標的のなりやすさに関連があることが確認された。そこで仮説1-1の結果を鑑みて、両者をガンマ係数で比較した。すると、いずれの指標においても「スクールカースト」の方が結びつきが強いことが示された。よって、仮説1-2は支持された。

続いて、階層が「スクールカースト」に与える影響を検証する。ここで用いる「階層」とは「文化階層」であり、蔵書数により、「文化階層」との関連を検証する。その結果、「文化階層」は「スクールカースト」とは相関が見られないことがわかった。よって、仮説1-3は支持された。

次に仮説2の分析を行う。仮説2-1に関しては、自己主張力、同調力が「スクールカースト」に影響するが、共感力は「スクールカースト」に影響を与えないことがわかった。よって、仮説2-1は一部支持されなかった。また、容姿は「スクールカースト」に大きく影響しており、仮説2-2は支持された。

続いて、仮説3を検証する。まず、「スクールカースト」が高いほど「(自分の気持ちと違っても)人が求めるキャラを演じてしまう」傾向があることが確認された。しかし、小学校5年生時の「スクールカースト」で統制すると、演じてしまう傾向があるのは、小学校5年生時に「スクールカースト」下位であった生徒だけであることも確認された。よって、仮説3は支持された。

5. 考察

これらの結果から、以下の知見が得られた。

「スクールカースト」とは、①生徒の学校生活への適応に大きく影響を与えており、その影響は「学力」よりも大きい。また、「スクールカースト」は階層の影響を受けない。②また、コミュニケーション能力との関連は、様々なメディアで叫ばれているが、「共感力」とは関連がない。そして「スクールカースト」は、生徒の容姿と関連がある。③過去に「スクールカースト」下位であった者が、「スクールカースト」上位に身を置こうとすると、自分の気持ちと違っても、偽りのキャラクターを提示しなければならないという負荷を伴う。また、もともと「スクールカースト」上位であれば、こういった負荷を伴うことは少ない。

(当日の発表では、これらの分析に加えて、さらに詳細な分析を行います。また、参考文献につきましては、当日配布のレジュメをご参照ください)